

1. 貧困と不平等：悪循環を断ち切るために

貧困と不平等の撲滅が人口増加を緩和する。

国際的には貧困撲滅が主流になる一方、国家間および国内における格差は依然として存在する。最貧国では極度の貧困、食糧不足、不平等、高い死亡率及び出生率が悪循環を生んでいる。特に女性と少女の健康、教育に投資することにより貧困を撲滅し、この悪循環を断ち切ることができる。

生活水準が向上すると、子どもの死亡を心配する必要がなくなり、多くの親は子どもを多く持たない選択をする。これにより家族や政府の負担が軽減し、子どもたちに保健医療や教育の両面で、より多くの投資をできるようになるため、家族単位や国全体の生産性が改善され、より長期的な見通しが可能になる。

出産間隔をあけることは母子の健康改善をもたらし、家族とコミュニティーに長期的な利益をもたらす。女性の職業選択の幅が広がり、収入は増加し消費も貯蓄もできるようになる。

子どもの少ない家族が増えると“人口ボーナス”に繋がる。労働人口が大きな割合を占め、扶養家族が少なければ、生産性は向上し、富を生み出し、経済は発展する。開発途上国の貧困を撲滅し不平等をなくすのが、国際人口移動を減らすための最善の方法である。

少女と女性が教育を受けられ、信用供与を利用でき、訓練を受けられ、財産を所有でき、法的権利を拡大することができれば、育児を終えた後の女性が多様な生き方を選択でき経済力を高めることが可能となる。

—現状—

- 研究によると、1965年から1990年の東アジアにおける経済発展のおよそ1/3は、人口ボーナスの結果とみなされている。つまり、政府が女性の健康と教育に対し投資をしたために、子どもの数が減少し、労働人口が扶養家族の数と比較して増加し、生産性が向上したためである。
- 世界の最貧国と呼ばれる国々では、深刻な女性差別により国の生産力を半減させている。それは、人口の半分の生産力しかもたないことと同じだからである。国連のジェンダー平等に関するランキングによる下位10カ国は、カメルーン、コートジボワール、リベリ

ア、中央アフリカ、パプアニューギニア、アフガニスタン、マリ、ニジェール、コンゴ民主共和国、そしてイエメンである。

- 農村部に住む子どもは都市部の子どもに比べて、2倍近く低体重児が多い。
- 南アジアの貧困状態は劣悪である。アフリカの26の最貧国は総勢4億1,000万人である一方、インドは8州だけでも貧困状態にある人口が4億2,100万となっている。

—傾向—

- 1日1.25米ドル以下という厳しい貧困下で生活している人は1990年には18億人だったが、2005年には14億人にまで減少した。開発途上地域では、人口の46%から27%に減少した。
- 2005年に開発途上国では、5歳以下の子どもの約4人に1人が低体重児であった。この割合は1990年の約3人に1人に比べると低下しており、特に中国での減少が顕著である。
- 飢餓で苦しむ人々の割合は1990年以来減少しており、アジア（特に東アジア）での変化に寄るところが大きい。しかし、世界全体の人口増加によって飢餓人口の数は、8億1,500万人から9億2,500万人に増加した。
- 最貧国で暮らしている家族のほとんどが、収入の半分以上を食費に費やしている。2010年6月以来、食糧価格が高騰したため、さらに4,400万人が1日\$1.25で生活するという貧困状態に追いやられた。
- 東アジアの貧困率は1990年のおよそ60%から20%以下へと低下した。しかしサハラ以南アフリカにおける貧困率は、58%から51%に低下するのみで、ほとんど進捗が見られない。
- 2008年から2010年の世界的な経済不況はさらに6400万人を極度の貧困状態に追いやったと見込まれた。その人々のほとんどがサハラ以南アフリカと、東および東南アジアである。

- 貧富の格差は広がっている。1960年には世界の20%にあたる最富裕層が世界の全収入の70%得ていたが、世界銀行によれば2005年には77%に上昇したことが判明した。その一方で、最貧層の5分の1の人々の収入は1960年の2.3%から2005年の1.5%に減少した。
- 気候変動は様々な面で貧困撲滅のための取り組みを狂わせかねない。特に干ばつ、洪水、また嵐による農産物の被害のため、2050年までに南アジアを中心にさらに2,500万人の子どもが栄養失調状態に陥りかねない。